

## 人口減少・子育て支援対策調査特別委員会会議記録

人口減少・子育て支援対策調査特別委員会委員長 佐々木 努

- 1 日時  
平成 30 年 8 月 2 日（木曜日）  
午前 10 時 2 分開会、午前 11 時 25 分散会
- 2 場所  
第 2 委員会室
- 3 出席委員  
佐々木努委員長、佐々木宣和副委員長、関根敏伸委員、小野共委員、名須川晋委員、  
佐藤ケイ子委員、千葉伝委員、柳村岩見委員、千葉絢子委員、工藤誠委員、  
高田一郎委員、木村幸弘委員
- 4 欠席委員  
なし
- 5 事務局職員  
竹花担当書記、須川担当書記
- 6 説明のため出席した者  
特定非営利活動法人 まんまるママいわて 代表理事 佐藤 美代子 氏
- 7 一般傍聴  
なし
- 8 会議に付した事件
  - (1) 調査  
花巻市からはじまる、安心し、生み育てられるまちづくり
  - (2) その他  
次回の委員会運営について
- 9 議事の内容

○**佐々木努委員長** ただいまから人口減少・子育て支援対策調査特別委員会を開会いたします。

これより本日の会議を開きます。本日は、お手元に配付しております日程のとおり、花巻市からはじまる、安心し、生み育てられるまちづくりについて調査を行います。

本日は、講師として特定非営利活動法人まんまるママいわて代表理事の佐藤美代子様をお招きしておりますので、御紹介いたします。

○**佐藤美代子講師** 本日は、貴重な機会をいただきありがとうございます。時間を 1 時間頂戴いたしておりますので、一生懸命発表させていただきます。

○**佐々木努委員長** 佐藤様の御略歴につきましては、お手元に配付している資料のとおり

でございます。

本日は、花巻市からはじまる、安心し、生み育てられるまちづくりと題しまして、出産前後の女性を心身両面でサポートする産前産後ケアハウスまんまるぼっとの取り組み等についてお話をいただくことになっております。佐藤様におかれましては、御多忙のところ、このたびの御講演をお引き受けいただきまして、改めて感謝を申し上げます。

これから講師のお話をいただくことといたしますが、後ほど質疑、意見交換の時間を設けておりますので、御了承願いたいと思います。

それでは、佐藤様、よろしく願いいたします。

○佐藤美代子講師 では、花巻市からはじまる、安心し、生み育てられるまちづくりと題しまして、お話をさせていただきます。

まず、自己紹介をさせていただきます。岩手県の盛岡市出身で昭和53年生まれの39歳になります。私は、盛岡市の町なかで育ち、そのまま看護学校も助産師の勉強も盛岡市でしました。その後、岩手県医療局に就職しまして、一番最初に配属されたのが岩手県立久慈病院でした。岩手県立久慈病院では、当時、葛巻町の母子医療センターがなくなった直後に配属になりまして、岩泉町と、当時はまだ統合されていなかった大野村や、種市町などの、近隣市町村からも岩手県立久慈病院に出産に来るような状況でした。妊婦たちは、冬は雪があり遠くから来るので、非常に大変な思いをして出産に来ると聞いていました。混合病棟で、小児科や耳鼻科と一緒に病棟でした。5月から夜勤がスタートし、たった2カ月で、お産は新人助産師の私1人で見なければならぬ状況でした。

その中で、冬の朝5時半ぐらいに経産婦からお産ですと電話がかかってくるので、すぐ向かってくださいと言いましたが、なかなか来ない。すごく胸騒ぎがして、ふだんは産婦が来院して診察の後に先生に電話しますが、その日は1時間後ぐらいに小児科と産婦人科の先生を呼びました。そうしたら1階の救急センターから赤ちゃんがもう生まれていまして、走って行くと、車中分娩ということで、車の中で産婦が赤ちゃんを産んでいました。なぜそういった状況になったかということ、岩手県の議員ならばわかると思いますが、沿岸部は時々どか雪といって30センチから50センチぐらいの雪が降り、すごく深くなったため、陣痛が始まってから、雪をおろして、暖めるということをしていたら、間に合わなかったということです。

その後、結婚を機に花巻市に転居しましたが、平成16年に岩手県立花巻厚生病院の産婦人科が休診になりました。その年に私は転勤してきたので、花巻市で本当は働きたかったのですが、産婦人科がないということで、助産師だったら産科のある病院に行きなさいということで岩手県立北上病院に配属になりました。

平成13年から岩手県立遠野病院、岩手県立胆沢病院、岩手県立江刺病院と、花巻市で年間400件ぐらい分娩を扱っていた岩手県立花巻厚生病院が1年、2年で次々と産科が休診して、年間800件ぐらいのお産する場所がなくなったということで、私が働いている岩手県立北上病院に妊婦、産婦だけではなく、がんの方もみんなが来ました。かといって、助産

師、医者的人数が倍になるかというそうではなく、本当に戦場というか、ナースコールを持って病棟を走っていると、向こうでは分娩、向こうでは終末期でがんのターミナルの方から呼ばれる、あっちでは手術後の方から呼ばれるという中を、安全に、優先順位を考え、毎日走りながら、田舎に住んでいる人、特に遠野市から来る産婦たちが非常に苦しい思いをして産んでいるのを見ました。

車中分娩もそうですし、もう間に合わないから救急車で来て、その車内で赤ちゃんが産まれることや、通常だったら妊婦健診に1時間かかって来て、見てもらえますが、臨月になるとお腹が大きくなり毎週通うのですけれども、雪の日の妊婦健診は、その毎週1回の健診に、2時間から3時間かけて山を越えて妊婦健診に行きます。でも、病院はいっぱい人が来ているから、5分、10分の健診で帰されるという状況を見ていました。これは盛岡市の町なかで生まれ、育った私にはすごくショッキングな出来事で、どうして田舎に住む人だけがこんなに大変な思いをしなければならないのか、大変な思いをするのは産んでいるお母さんたちということに疑問を感じ、5年間で岩手県立北上病院を退職いたしました。

保健師、助産師、看護師に保健師助産師看護師法という法律がありますが、開業権を持っているのは助産師だけで、地域で開業できるのが助産師だけになります。何か私でも地域でできることがあるのではないかとということで、公務員をやめて、1年間、東京にある矢島助産院という、日本で一番大きい助産院で1年間修行をしてまいりました。法律的には正常な分娩は医師がいなくてもできることになっており、矢島助産院では、年間200件ぐらい分娩を扱い、異常分娩になったら救急車で搬送できる状態をつくっています。そして、次の年に戻ってきて、自分で母乳相談、育児相談の助産院を開設しました。その後、東日本大震災をきっかけに、今の団体を立ち上げました。

まんまるママいわてという私たちの団体は、2011年の東日本大震災をきっかけに立ち上がった助産師とお母さんたちがメインで活動している団体です。妊婦、乳幼児を育てている女性たちの体や心の専門家である助産師が、お母さんたちとつながることで岩手県全域のお母さんたちが少しでも不安がなく、楽しいマタニティライフ、育児生活を送れるように活動しております。

きょうは、人口減少・子育て支援対策調査特別委員会ということでお話させていただくのですけれども、人口減少とか子育て支援というのはいろんな側面があると思います。私がかかわっている子育て支援と人口減少というのは、妊娠前から結婚を考えている、将来結婚したい、子供が欲しいと思っている若い男性、女性を対象に、妊娠したときから私たちはかかわっており、妊娠、出産、育児のスタートから大体1年目くらいまでをメインに活動しています。その後、1歳、2歳、3歳となると保育園の問題や、小学校に入ると学童保育の問題、中学生、高校生になると学費とかいろんな問題があるとは思いますが、私がかかわっているのは妊娠前から出産後1年くらいまでの部分の支援ということで、きょうはそちらの部分をお話させていただきます。

こちらは私たちが活動している地域で、いままで活動してきた地域をピンクにしております。盛岡市でイベントを行うと滝沢市からも来ますし、宮古市で活動すると岩泉町、山田町からも来ます。県の中央部から沿岸までが活動範囲になっております。震災後の支援からスタートしたので、真ん中の内陸が沿岸を助けに行くということで、肋骨支援とよく言われました。今も私たちのメインは花巻市、北上市のメンバーですので、大槌町、釜石市にはよくお邪魔しています。

去年の事業概要ですが、ふだんは何をしているかという、岩手県内の妊産婦や乳幼児を持つ母親、その家族、母子支援者等に対して、母子、家族支援に関する事業を行い、すべての人が一人ひとりの生と性、こころとからだを大切に、いのちを喜び支えあえる社会を目指して活動しております。

メインの事業を少し説明させていただきます。私たちは震災後からスタートして、今もメイン事業の柱になっているのが、まんまるサロンです。子供に対する支援というのはたくさん入ったのですけれども、お母さんたちに対する支援がありませんでした。でも、お母さんたちは日々忙しく夫を支え、子供を育てて、もしお金が200円あれば、100円はお父さんのために缶コーヒーを買い、100円は子供のためにお菓子を買うといったように、お母さんたちは日々頑張っていました。東日本大震災後、内陸に住んでいる私たち助産師ができる復興支援は何かと考えたときに、しんどいと言っていい場所をつくりたいということでお茶飲みサロンをスタートしました。

これは大槌町の公民館でみんなが楽しんでいる様子です。被災地の議員もいらっしゃると思うので、現状をよく知っていると思うのですが、被災地域ではいろんな方が被災されて、隣の人がどういう被災をしているかわからないという中で、自分がもし大変だと思っても、隣の人はもしかして夫を亡くしているかもしれない、実家をなくしているかもしれない、家は流されたけれども、うちは家族が残っている、自分はましなのかもしれないといった我慢をするので、こういう全体のところでは意外と東日本大震災の大変な話が出てきません。けれども、そのときに受けた傷というのはすごく深く残っております。私たちがアロマオイルを使いながら手を触ったりする、ハンドマッサージという個別の時間をとると、その方は東日本大震災から3年ぐらいいしてから言ったのですが、自分の両親が亡くなったけれども、自分は妊娠していて全部お兄ちゃんに任せてしまった。今から両親を弔ってもいいだろうか、手を合わせに行ってもいいだろうかということを泣きながら話しました。あと、旦那を亡くした妊婦が東日本大震災から4年ぐらいいしてからこういった場所で、美代子さん、私も幸せになっていいでしょうか。私も新しい家族が欲しいけれども、亡くなった夫に申しわけないし、夫の両親にも申しわけないのだけれども、私もこの子と一緒に幸せになっていいのでしょうかという話をされました。すごく楽しい場所、気持ちの吐露ができる場所ということで、ハンドマッサージは今も続けています。

宮古市、大槌町、陸前高田市、久慈市などでもやっていたのですが、ことしからようやく釜石市で委託事業になりまして、産前産後サポート事業ということで、月に1回のサロ

ンを行っております。

私たちは2011年の9月に団体を設立しました。お母さんたちの声を生かしながら、こういうものが欲しい、こういうことをやってほしいというのを聞きながら、さまざまな事業をしてきました。母親たちがサロンでお昼寝したい、でもお父さんに悪いけど限界が近い、産後休めなくて全部家事育児一人で頑張った、おっばいが張って痛かった、頑張れたけどつらかったと言いました。私がつらかったねと言って受けとめてもらうだけで十分という方もいました。

そういう状況で40分、50分、1時間かけて山を越えて、産婦人科に通う妊婦も珍しくない中、病院はそのとおりに忙しいので、出産後の入院日数も短くなっています。私の前の世代の人たちは、自然分娩、経膈分娩すると大体1週間、帝王切開だと10日から2週間は入院していました。今は、経膈分娩して、早ければ4日で退院、初産でも5日目で退院です。帝王切開でも次の日から歩く練習をして、7日目には退院というように入院期間が短くなっています。短くなっているけれども、病院のスタッフはみんな忙しくしています。助産師も医者も非常に忙しくして、パソコンみたいな電子カルテを持って走っているイメージです。

旦那たちは家にいなかったかもしれないですが、私たちの先輩の世代は、自分のいとこや、お姉さん、お兄さんのお嫁さんなどの赤ちゃんが生まれる姿をなんとなく見ていた世代で、60代、70代の方たちは、何となく子供が生まれるらこういう生活になるという、自分の母親、兄弟、姉妹が助け合ってきた時代ではないかと思います。自分は育児をしなかったという、心当たりのある議員はいらっしゃいますか。今の平均初産年齢が30歳で、私もまだまだ産めるのですけれども、ちいさいころから周りに兄弟も多くな、赤ちゃんを見ることがないと、大学まで行って、その後就職して、30歳まで新生児をだっこしたことがなく、自分が妊娠して初めて抱く赤ちゃんが自分の赤ちゃんという人が、たった5日間でおむつがえ、おっばいのやり方、夜泣きには対応できません。でも退院します。そのとき、またわからないことがあったから、1時間かけて病院に聞きに行くかという、病院も忙しく、聞きに行きません。そういうことで、とにかく必死で育ててきたけれども、しんどかったという人たちの声をたくさん聞いてきて、個別にケアできる場所が必要ということで、本題になります産前産後ケアハウスまんならぼっとという事業を立ち上げました。

産後ケアという言葉が出てきて、まだ5年ぐらいです。ここ4年ぐらいでようやく厚生労働省で、岩手県内全部に平成32年度までに子育て世代包括支援センターをつくらなければならない、どこの市町村でも産後ケアをスタートしなければならないと言い始めています。実は産後ケアという概念自体が新しいもので、産後ケアといえど何でも産後ケアです。なので、保健師、助産師が赤ちゃんの産まれた家庭にお邪魔するのも産後ケア、家事サポートみたいな自宅の家事を手伝うのも産後ケア、私たちの団体でも東京都から呼んでいますが、バランスボールを使ってエクササイズをしながら、体と心を整えるのも産後ケアと

ということで、いろんなものが産後ケアに含まれます。私たちが行っているのは、お母さんと赤ちゃんに来ていただいて休んでいただける場所を設けるという滞在型の産後ケアで、県内では私たちが初めてになります。

私たちがそういうお母さんたちの声を聞きながら、どう取り組んできたかという、平成26年に助成金をもらって視察をするところからスタートしました。1回目は福島県に行きました。2回目は東京、関東方面の5カ所視察に行って、その後に東京都で産後ケアに取り組んでいらっしゃる先生をお呼びして、施設の報告会と基調講演をしていただきました。平成27年には花巻市の市議会議員をお招きしました。あと、母親たちとの意見交換を行いました。なぜならば、平成26年あたりから行政に対して産後ケアをやりたい、産後ケアが必要だと要望をしていたのですが、行政では産後ケアが必要という声はまだ聞こえてこないと言われました。母親たちは産後ケアという言葉を知りません。なので、産後ケアが必要だという言葉自体は出していないですが、議員に集まっていたいて、意見交換をしたときに、岩手にはまだ里帰り文化があり、自分は実家に帰ったけれども産後しんどかったという話になりました。産後ケアが進んでいる都会では、高齢出産がふえていて、45歳以上でも50歳でも産みます。お金がある経営層などは、御結婚も遅くて40を過ぎてから御結婚されます。45歳になると自然に自分の卵子で妊娠することはなかなか難しいので、渡米して卵子提供を受けて、お腹に戻して帰ってくるということで50歳となります。野田聖子議員もそうです。そういう状況で45歳から50歳でも妊娠出産される方も多いです。そういう方たちは、自分の親も80歳に近く、そういうお金がある人たちのための産後ケアだと言われています。

議員との意見交換で出てきたのは、岩手県だからこそ里帰りをしてきますが、農業県でするので、実家が農家、漁業をやっている家庭は結構多いです。そうすると、娘がお産でお世話されるために帰ってきたのだけれども、農繁期だとお母さんもお父さんも昼はずっと畑にいますので、自分がお昼御飯ぐらい用意して待っているという家庭も多くあります。あと、昔に比べて女性も50代、60代でパートの仕事を持っている人が多いので、娘が産後の里帰りをしてきてもなかなかお世話をできません。娘たちも20歳そこそこで産むわけではないので、30歳ぐらいになってくると、帰ってきてお母さんが大変そうだ、お父さんが大変そうだ、夜はお母さんたちを休ませなければならぬから、赤ちゃんが泣いても自分で頑張らしようという気の使い方をして、里帰りしてきたのだけれども、ぼろぼろになっているという話を議員に聞いていただきました。そこで議員が、できることはないのかと言ったときに、東京都ではこういう産後ケア施設があって、宿泊ができ、自宅に来てサポートが受けられますというところから、産後ケアという概念を少しずつ広めていく活動をしました。

その後にいろいろやりながら、産後ケアをやりたいと行政に言ったときに、産後ケアを委託できるといいだろうけど、実績がないので委託はできない。産後ケアが必要だという声は出ているけれども、それはたまたま議員と意見交換に行ったそのママだけで、データ

がない、エビデンスがないと言われて、エビデンスをとるために岩手県立大学と地域協働研究をして、自分たちでエビデンスを出すということもしました。

その後、去年の4月に委託が決まりましたけれども、さきほどのように実績がないと言われたので、2016年度に厚生労働省ではなく、福祉や医療の独立行政法人福祉医療機構、通称WAMという医療系の助成金を出している団体からお金をいただきました。

東京では宿泊型もあり、助産師、理学療法士も毎日います。そんな立派な施設ではないですが、とにかくスタートしないとずっとゼロですので、実績をつくるために、私の自宅が6畳2間の助産院として登録をしていたので、2016年の10月に自宅でスタートしました。本当は花巻市内にある立派な個人産婦人科の一軒家の空き家があり、そこでスタートしようと思ったのですが、そこが医療法により医療法人の持っている建物はほかの法人に貸してはいけないということでだめになりまして、しょうがないから自宅でスタートしました。

10月にスタートして、すぐに利用者が少しずつ入り始めました。そこで、花巻市で来年度からは市の委託事業にしようということ、いろいろな人に御協力いただいて去年から花巻市の委託事業になりました。

2016年10月から2017年度は自宅で行っていましたが、去年、委託事業にされたことで利用者が倍増してしまいました。我が家は6畳2間の2床で、1日2組の母子しか受け入れられず、しかも月曜日、水曜日、金曜日という契約だったので、週6人までしか受け入れられません。ふすまで仕切られた家でスタートしてしまったために、精神的な鬱の人が来てしまうと、その人の話の内容が隣の人に全部聞こえてしまいました。スタートしてすぐに2組の母子を入れたときに、こんな子は産まなければよかった、養子に出せばいい、私は何で産んだのだろう、何で産んでしまったのだろうということを私たちに語る姿を隣で聞いていた人が、しんどくなってしまったことがありました。現状の設備では昔の野戦病院ではないけれども、カーテンで仕切っているよりはまだまだという状況で、プライバシーも守れないし、心身ともに休んでいただくために、ことしの4月に引っ越して、花巻市内に新しい一軒家を借りてスタートしています。

毎週月曜日、水曜日、金曜日の午前9時から午後4時までお母さんたちを受け入れるというので、お布団、授乳枕、パジャマとかを準備して、部屋を四つ用意しております。あとお母さんたちは、赤ちゃんが産まれた後はおむつをたっぷり持って、赤ちゃんを抱えて、家出少女みたいな荷物を持って出かけます。筋肉トレーニングみたいな感じで毎日出かけるので、おむつやミルク、お洋服は最低限で済むように全部準備しています。

何を行っているのかというと、チラシにもあるように、メインの事業が日帰り型デイサービスで午前9時から午後4時まで行っています。午前9時に赤ちゃんと一緒に来ていただいて、午後4時までいられて、お昼とおやつがついて、利用者の負担は3,000円です。一日中いなくてもよくて、おっぱいだけ相談に乗ってほしい、赤ちゃんの体重だけチェックしてほしいという方は半日ということで、午前か午後の3時間来ていただいてお茶を出

し、利用者負担額は1,000円で引き受けています。

もう一つは、車がないから行けないが、おっばいと赤ちゃんの体重とミルクの足し方を見てほしいときには、その方の自宅にお邪魔します。利用者の負担額が1,000円で、生後5カ月未満の月齢であれば、3つの事業から、その間に最大5回まで使えるのが花巻市の委託事業の内容です。

あとは、産前産後サポート事業で、個別のケアではなく、集団型の支援で、先ほど御紹介したお茶のみサロン、ヨガ教室を月に1回行っており、市内の方は無料で利用できます。

あとは全市町村で既にやっていますが、こんにちは赤ちゃん事業です。北上市だけは民生委員がお邪魔していて、他の市町村は保健師や看護婦、助産師が行っていることが多いです。花巻市では45人ぐらい生まれるのですけれども、そのうち月8人から10人ぐらいは私たちがお邪魔しています。

では、何しているのかというと、午前9時に来院、その後問診をして、おっばいの方はおっばいのケアをして、あとはアロマオイルを使って背中トリートメントをして、少しリラックスを促すと、そのままずっと寝ます。その間は、赤ちゃんを預かりますと言うと、預けて休む方が多いです。お昼になるとお食事を食べます。大体そのあたりになると2、3時間たっているの、赤ちゃんがまたおっばいとかミルクを飲みますので、その飲ませ方や吸わせ方を見ます。午後は赤ちゃんのお風呂の入れ方の練習をして、午後3時になるとおにぎりのおやつを出して、午後4時まで自宅での過ごし方や、3回目の授乳指導をしながら、午後4時になると帰宅という流れになります。

先ほども言ったように、授乳用のパジャマでサイズ別に長袖、半袖を用意しています。お金がないので、お母さんたちに使わなくなったものを譲ってくださいませんかと言って集めることや、セール時期になって安くなったものを買います。皆さん普通の洋服を着てくるので、お着がえになりますかと言うと、ほとんどの方が着がえてパジャマになります。赤ちゃんの洋服、ミルク、哺乳瓶、沐浴に必要なもの、おへその処置に必要なもの、お母さんの入浴セットということで、シャンプー、リンス、ボディソープ、おむつにお尻ふき、バスタオル、フェースタオル、ナプキン、体重計なども全部準備して、お母さんがなるべく母子手帳と印鑑とお金だけ持ってくればいようにしております。

沐浴の様子ですけれども、赤ちゃんの入院中に沐浴指導を受けます。皆さん自分の奥様とか、あとは御自身が沐浴指導を受けたかを覚えているかどうかわからないのですが、両親学級などではお人形でやるので、生身の赤ちゃんとは違います。個人病院だと1対1で、きょうは木村さんの赤ちゃんのお風呂の入れ方の練習をしますと言って、木村さんのお父さんがいらっしゃったから、きょうはお父さんにも見てもらうという対応してくれる個人病院もあります。

大きい病院や、私がいた岩手県立北上病院、現在の岩手県立中部病院では大体火曜日と水曜日など、沐浴指導の日は決められています。件数が多いので、きょうは木村さんの赤ちゃんを借りましょうと言って、10人ぐらいで集まって、のぞき込んで、木村さんの赤ち

ちゃんが入るところを見て、沐浴指導が終わりとなります。そのため、入れ方もわからないとか、お父さんも産婦人科の朝の9時には来られず、沐浴がわからない状態で帰ります。

このお父さんには、退院してすぐにまずお風呂の入れ方がわからないので教えてくださいということで、お父さんの赤ちゃんを使って指導します。新米おばあちゃんについては、私のときとはどうも違うらしい、昔とは違うと言うけれども、何が違うのかわからないので、教えてくださいということで、家族の指導で来ていただいたときは、本物の赤ちゃんがいたので、1回本物の赤ちゃんの沐浴を見ていただいて、あとは人形でおばあちゃんが練習するという、家族への指導もします。

2週間ぐらいすると赤ちゃんに皮脂分泌があつて湿疹が出ます。おばあちゃんたちは今の赤ちゃんたちはきれいだ、昔はもっと赤くて汚かったと言いますが、1カ月ぐらいになると湿疹が出ます。そのときに石けんをつけて洗ってくださいと言いますが、つけ方がわからなくて怖いということで、洗いはこうやるんだと言って、石けんをつける姿を見せると、こんなにつけていいのですねとなります。昔だったら、おうちで実家に帰るとおばあちゃんやお姉ちゃんが教えてくれたことかもしれないのですが、今その場所がないから、ここで、個別に丁寧に教えます。

あとは、お昼の様子についてですが、お昼になるとみんなで御飯を食べるということをしています。赤ちゃんが生まれて、1カ月程、里帰りする方が多いので、実家にいる間は一生懸命食べさせてもらうのですが、1カ月を過ぎてアパートなどに戻ってくると、途端に皆さん御飯を食べなくなります。なぜかというと、だっこしないと寝ないということと、旦那が朝はいるので旦那に何か食べさせなければなりません。何か適当にはあるのだけれども、お昼御飯なんて食べなくてもいいとなり、だっこしたまま食べられるものということで、バナナや菓子パンなどをつまんで終わりという人がいます。最近おっぱいが出ていない気がする聞き、お母さんたちにお昼食べているかと尋ねると食べておらず、バナナ、菓子パンで済ませているという人が結構いるので、母乳は食べないと出ないから食べよう、徐々に両手を離して、赤ちゃんをだっこしてあげるから食べてみてと言うと、徐々に温かいものを温かいうちに食べられたと言うお母さんが多いです。

私自身、両親が離婚していて、母がいませんでした。なので、1カ月盛岡の実家に戻ってきて父にお世話してもらったのですが、赤ちゃんが泣いたら自分でどうにかしなければならぬので、赤ちゃんにおっぱい上げながら食べるのが上手になりました。でも本当は誰かにだっこしてもらって、食べていいと言われることがどんなにうれしいか。それは、助産師ではなく、隣のおばちゃんでも友達でもできるけれども、今はそういう付き合い方がなかなかできないので、こういうところで、たまにみんなでいろいろおしゃべりします。ずっと話の通じない赤ちゃんに語りかけても、返事はせず、旦那が帰ってくるまでずっと一人なので、この食事をすごく楽しみにしてくれているお母さんたちがふえたので、まんまるぽつとを利用できなくなった5カ月以降も、お母さんたちのランチ会を企画して、こうやってみんなで集まって御飯を食べることもしています。

初年度の 2016 年度に自宅でやっていたときの利用者数が、10 月から 3 月末までで、延べ 59 人です。そのときは、WAMの助成金を使っていたので、どの市町村の方も一律 7,000 円でデイサービスを使えました。11 月に岩手日報に取り上げていただいたら、すぐその日に盛岡市の方から産後 5 カ月ぐらいですけれども、あした行っていいですか、とにかくそういう施設がないからしんどかったと電話が来ました。うちは花巻市で北上市に近いのですが、朝 8 時に出て、なれない運転をして 50 分から 60 分かけて、赤ちゃんと一緒に来てくれました。里帰りではなく盛岡市から花巻市まで来て、うちの施設を利用した盛岡市の方が 3 名おりました。陸前高田市の 2 人はお友達同士で、陸前高田市から 2 人で車に乗り合って、陸前高田市にないから 1 回受けてみたい、毎回は来られないけれども、1 回は受けてみたいから行きたいと言って、来ていただきました。あとは里帰り中もありました。

初産、経産の利用者についてですが、初産が 23 人で経産が 15 人ですので、初めてのお母さんだけが利用する施設ではありません。経産婦はなれているように見えて、2 人目だから、3 人目だからいいでしょうと言われるのですが、2 人のお母さんになるのは初めてで、3 人のお母さんになるのは初めてです。もういいねみたいな感じで意外とケアを受けていません。しかも、自分の年齢も上がっており、ちょっと体もしんどくなっているのです。そういう人たちも利用します。だから、初産の人だけでいいという設備ではなくて、経産婦の人たちも利用しています。

これは去年、花巻市の委託になってからのデータ数です。去年は花巻市で生後 6 カ月まで計 7 回使えました。デイサービスを使った方は 130 人です。去年は花巻市の方はデイサービスを 3,000 円で使えました。それ以外の市町村の方は 1 日 2 人とか入らないと、助産師、保健師、事務員もおおり、自費の方からは 1 万 5,000 円いただかないと経営が成り立ちませんでした。それでも去年は 3 人の方が 1 万 5,000 円出しても来たいということで利用しました。

延べ 249 人ということで非常に多くの方が利用して、どこの市町村の方が利用したかを丸で囲んでいます。花巻市にアクセスのいいところはみんな利用に来ています。それぐらい、こういう施設がなく、求めています。ある程度お金を出してもいいから、行きたい人が来るという施設になっています。

では、その人たちがどんなことに困って来ているのかというと、44%は乳房、母乳に関することです。おっぱいは産んだら聖母マリアのイメージで出るようなイメージがあるのですが、含ませるところ、赤ちゃんの口の大きさ、痛かったり、引っ張られたり、熱が出たりなどトラブルがあります。あとは自分の体で、とにかく疲れた、しんどい、がたがただという人たちが養生、リフレッシュ、不安とか疲労があるからここを使いたいという人が半々を占めています。

あと、先ほど言ったように、自主事業で両親学級をしています。利用した方の感想は、皆さんの資料にも入っていて、下の表、利用した方の感想の 6 番のところですが、実家が遠いので、こういうサービスはすごくありがたいです。都会にはあったけれども、岩手で

あるなんて画期的です。もっと広がってほしいという感想がありました。また、1番のところですが、子供と一緒に連れて、自分もゆっくりできる場所がないといった感想がありました。お母さんたちを休ませたいのであれば、一時保育とかに行ったらという意見も出ます。一時保育というのは保育園で、月に12日リフレッシュのために使っていいとなっています。一時保育を利用したいと電話かけると、まず、どうして利用するのですかと、利用理由を聞かれます。そうすると、美容院に行きたい、リフレッシュと言うと、ほかの仕事の方で待っている方がいるので、そちらを優先しますと言われます。1回そういうことがあると、どこの保育園もいっぱいなので、やっぱりだめだと思ってもう使えません。

あと、一時保育やファミリーサポートセンターなどは手続きが面倒です。きょう利用したいから電話しようではだめです。8月20日に予約したいというのを8月2日から電話しておいて、その地域でいる方、該当するお婆さんがいるかどうか調べておきますので、再度電話を下さいと返答をもらい、1週間くらい前にまた連絡して、ではファミリーサポートセンターの方と面接をしましょうという流れなので手続きが複雑です。赤ちゃんを預けて寝ればいいということでもありません。母乳だからやっぱり2、3時間でお腹がすいてしまう子も多いので、泣いても家だと自分が起きていけないといけないけれども、赤ちゃんと一緒にまんまるぽつと行って、実家みたいに同じ家の中にいて、しんどかったらちょっと預かるよ、だけどそうじゃなかったら戻るよ、誰かが抱っこしてくれたみたいな声が聞こえて、このとろとろのまま寝ていいみたいな安心感があるので、とにかく赤ちゃんとお母さんを離せばいいということでもありません。ホルモンの状況があり、また、日本は母親神話が強いので、赤ちゃんを預けるなんて何てだめな母みたいに自分を責める方もいます。なので、生後4カ月ぐらいまではお母さんと赤ちゃんが一緒に行って、赤ちゃんとのリズムの中で、預かれるときは誰かが見ていると安心できるという声が非常に多いです。

私たちは、まんまるぽつとだけではなく、まんまるサロン、まんまるヨガ、まんまるキッチンなどいろいろやっています。つらいとまんまるぽつとに来て、その後まんまるヨガに行って、まんまるサロンに行って、まんまるキッチンに来てという、少しずつ個別のケアから集団のケアになり、地域の子どもセンターや保育園にそこでできた友達と一緒に行くようになって、地域の子どもセンター、子育て支援センター、ファミリーサポートセンター、一時保育のような地域にあるサービスを使えるようになっていくというすき間を埋めるケアだと思います。

課題ですけれども、行政からの委託は1年更新です。おそらく花巻市は来年度も委託は継続するのでしょうかけれども、契約書は3月31日までなので、どうなるかわかりません。きょうは委員長から忌憚のない意見をとと言われておりますので、申し上げますと、私も助産師として対応はしていますが、経営的なものを余り勉強はしてこなかったもので、花巻市との委託の金額を決めるときに弱いです。行政の方はなれていらっしゃるの、委託というのはこういうものだと言って、予算書を見て、ここ削れる、これ要らないと言って削られてしまいました。ことし引越したのですけれども、引越す前から物件は確保しなけれ

ばならないし、家賃はそのときに全額を自分たちで払わなければならないし、引っ越し費用も出なかったのので、去年、あんなに患者さんがあふれて、ちょっと出た余剰金が全部引っ越しで消えてしまって、この3カ月は赤字経営をしていました。

少しずつ助産師たちもこういうケアに目が向いてきました。県立病院で年齢的に夜勤はしんどく、子供ともうちょっと一緒にいたいから、日勤だけということで、美代子さんの仕事、幾らもらえるのと聞いてきて、まだまだ時給これぐらいとそろばんはじくと、ちょっと無理と言われます。大きい病院の岩手医科大学、県立病院、日本赤十字病院とかだと、医療職というのは普通の事務職の39歳より給料がもらえます。それと遜色ない仕事をしている自負はあるものの、金額は出せないのので、働く人が出てきません。そうすると、結局細々と自分たちのものを使ってという経営状態を続けていくことになり、なかなか広がらないと思います。さらにアドバイザーなどを自分たちで探しに行ったりとか、自分たちで税理士に相談したりというお金もなく、本当に厳しいというのが一番の実情です。

あとは、宿泊について年に3回ぐらいお電話をいただきます。今まで宮古市、岩泉町、釜石市の方からお電話をいただきました。両親が津波で流されましたが、旦那の実家は福島原発地域だったので、帰れません。1人目のときはまだよかったけれども、2人目になり、上の子の保育先も考えるとなると、どうにか宿泊で3週間は休みたいので、行けないですかとお電話いただきました。うちはまだ宿泊はやっていないというと、とにかくお金を払うので、岩手県内で3週間私と上の子と赤ちゃんとお世話になりたいのですがどこかないですかと言うのですが、今御紹介できる施設が県内で一個もない状況で、一番近くて仙台です。しかも、デイサービスで1万5,000円ですから、泊まるとなると1日3万円になり、1泊2日で大体6万円ぐらいが経営するために必要です。その3万円掛ける21日となり、多額の金額を払ってまで、仙台に行くかという行かないので、その広がった骨盤でだらだら出血している中、ぼろぼろになりながら上の子も赤ちゃんも見ます。そんな状況だったら鬱にもなると思うので、宿泊に関しては検討が必要ではないかと思います。今奥州市で動きがあるようですけれども、県内に一つでもやらなくてはならないのではないかと思います。自分たちのところでやれるかという、経営面や夜勤、スタッフを確保することが非常に大変という問題点があります。

産後鬱は今10万人ぐらいと言われていて、大体産む人の10人に1人が産後鬱になっているのではないかとされています。私もその傾向がありました。自分は助産師なのに何でこんなに赤ちゃんを泣かせてしまうのかと、言えなかったけれども、しんどかったです。鬱がつかると赤ちゃんに気持ちが向かなくなります。泣いていても手が出なくなるのです。なので、虐待、そしてネグレクトみたいな感じにつながっていきますし、そういう状態が続くと夫ともコミュニケーションがとれなくなり、夫婦が不仲になることを産後クライシスと言います。実は離婚の半数が、赤ちゃんが生まれて1歳未満に起こると言われています。虐待死亡の半数は実母が加害者です。産後クライシスという夫婦の不仲で離婚すると少子化、貧困も進むので、諸悪の根源はここにあります。いつも行政に言われるの

は、行政で産後クライシスをどうにかしたいから、ここに対してやってくださいと言いますが、ここまでくると私たちのところまでなかなか来られないのです。

赤ちゃんを産んで元気に育てられるとか、困ってもいいから頼れる場所があるとか、相談場所があって、何とか産みたいと思えるような社会になりたいと思いますが、その間のグレーゾーンが多いと思います。何も考えなくてよい位夫に収入があり、本当に元気な人は多分2割ぐらいではないでしょうか。それこそ初めて赤ちゃんを産んで、夜にこんなに起きるなんて知らなかったとみんな言います。私も仕事で見えても知らなかったです。24時間誰も交代に来ないで自分が見るということに、自分が産んで気づきました。夜勤のときは交代が来たから、夜中に8時間起きていても平気でした。産後でハイテンションになった後、朝になっても誰も交代が来なくて、ずっと24時間365日自分が見て、育児が続くとなるとつらいと思いました。私は助産師なので、夫が、あなた助産師でしょう、仕事でやっているのに、何でできないのと言います。本当にしんどくて、困っていました。お母さんだからできるでしょうか、1人育てたからできるでしょうか、何とかさんもやっているというのは、言うてはいけない言葉です。私にはできないみたいな、グレーな人はいっぱいいます。双子や、普通のお母さんでもいます。こういう人がどっちに行くかが分かれ目だと思います。

例えば夜に赤ちゃんが泣いているときにお父さんが、ずっと夜通しは厳しいけれども、1時ぐらいまでだったら何とかおむつがえをやるということ、この人も仕事が大変なのに、実際やるかどうかは別にしても、そういう気持ちを寄せてくれているというだけで、パートナーへの信頼度が増します。おっぱいが痛い、うまく吸わせられないといったときに今までは家族への支えや、医療職しか助けはありませんでした。そうではなくて、産後ケアということで、困ってもまんまるぽっに行けば何とかなる、美代子さんがいる、誰かが助けてくれるというのがほかの市町村でも浸透したら、グレーだった人たちは、低リスクになるのではと思います。逆にグレーのままでも何も支援が入らなければ、そのままハイリスクになっていくということで、産後ケアはグレーをよりホワイトに近づける予防医学に近い活動ではないかと思っています。

実際に開設後に感じたことですが、養生という産後21日は横になって休んでいましょう、21日目に床上げといって、敷きっ放しにしていた布団を上げましょうという概念が今はありません。聞いたことがない、寝ているとはどういう意味、寝ていればいいのでしょうかと言って、寝ながらずっとスマホをしています。そういうことではなくて、目を休ませてとか、骨盤と子宮を戻すのだから、ソファに座っているのではなく、体を横にして目を休めることだと言います。

ここに来るまでに養子に出そうか本当に悩んでいた、ここに来て頑張れると言った方は私と同級生のお母さんで、初産が36歳でした。育休のうちに2人目が欲しいからといって38歳で2人目を産み、上の子がまだ1歳半ぐらいでした。予定どおりの妊娠で、夫も公務員でお金もちゃんとあり、自分も仕事をちゃんと持っています。望んだ2人目の妊娠で、

行政の枠組みからしたら、グレーには入らない人で、ホワイトです。でも、この人は疲れていました。すごく疲れていて、自分の両親のところに行ってもなかなか甘えられないと言っていて、まんまるぼつとに月に1回きていました。まんまるぼつとに予約している3週間後までは頑張ってみようと言って3週間に1回ぐらいつつ来ていました。そこで、私が、まず半年たてば先が見えてくるかもしれない、とにかくあなたはよく頑張っているから、このままでいいから、3週間後またおいでと言って帰して、また3週間後を目標にしていました。そうやって生後半年になったときに初めて、本当に悩んでいた、何でこんなに育てるのがつらいのに私は2人目を産もうと思ってしまったのだろう、本当に養子に出さなければならないのかと苦しかったけれども、ここがあるから何とか頑張れたと言ってくれました。半年たったら、ようやく自分の子としてこの子を育てられるような気がしてきた、仕事が忙しいパートナーと一緒に保育園とかいろいろな人の助けを借りながら、多分私はやっていける、ここがあってよかったと言ってくれる人がいて、そういう人が一人でもいるということは、施設としてこういう場所があっていいのではないかと思います。

今後ですけれども、盛岡市は都会で病院はいっぱいありますけれども、逆に核家族化が進んでいます。また、岩手県内は広く、病院まで遠く、分断されている地域もあります。岩手県だから要らないではなく、どこの市町村にもこういう設備があって、遠くでなくても行ける病院と実家の間みたいな施設が必要ではないかということで、きょうの話を終わりたいと思います。

○佐々木努委員長 これより質疑、意見交換を行います。

ただいまお話いただきましたことに関して、質疑、御意見等がありましたらお願いします。

○佐藤ケイ子委員 自分の経験から考えたり、嫁の出産のことを考えて、私もちょっとつらくなりました。

産後のケアの仕方ですけれども、昔は21日は絶対寝ていろとか、休めとか、水を使うなと言われたのですけれども、今はもうお産してもすぐシャワーをする、すぐ歩くというので、寝ていなくてもいいと言われているようですが、本当にそれでいいのかとずっと思っておりました。きょうのお話を聞くと、21日は休ませたほうがよかったということで、知識があるようで、私たち自身、知識がないことを再認識いたしました。

よくイギリスの皇室の方もお産して、次の日は赤ちゃんを抱っこして外に出てフラッシュを浴びたりしているので、どうなっているのだろうと思っていましたが、あちらは、自宅に帰るとちゃんとケアをしてくれるスタッフがいるから、病院にいないで自宅に帰りたいたいというのを聞きました。それに比べると日本のシステムは全くなっていないのだと日ごろから思っておりました。この産後の21日の過ごし方というのは本当に必要な休みなのかどうかについて伺います。

それから、健康診断の仕方ですけれども、1カ月健診とか3カ月健診とか産後の健診とともに子供の健診はありますけれども、親子で病院に行くことが主体で、来てもらうこと

がほとんどない時代です。私たちのときの昔は、助産婦、保健師が1カ月、2カ月、3カ月に家庭に来てもらって、さまざまなお話をしてもらってヒントをもらってということがあり、今になって思えば、必要だったと思います。でも、市町村ではそのようなことをなかなかできなくて、健診に行きなさい、来なさいとなります。行けない人はどうなのということが、本当に問題だらけだと思っております。

北上市では赤ちゃん訪問を民生委員がやっています。それは、赤ちゃんのためではなくて、民生委員のためです。民生委員が地元にどういう子供たちが生まれたのかを把握するためにやっているのだから、赤ちゃんとかお母さんのためにやっているのではないので、母子にとっては不足していると思います。ほかの市町村では、今もまだ保健師が行っているお話でしたが、そこはどうなっているか教えていただきたいと思います。

○佐藤美代子講師 まず1点目の、産後21日の床上げに関してですが、床上げまでは養生といって寝ることは必要だと思います。先ほど少し話したのですが、帝王切開でも自然分娩でも骨盤が広がります。大体30センチぐらいに大きくなった子宮が、出産直後だとまだおへそぐらいでさわれます。退院5日目ぐらいだと恥骨の上ぐらいまでで、まだまだ触れます。胎盤が剥がれた生傷ですので、この中で出血し、それが横になることで戻っていきませんが、今動く人たちが多く、1カ月健診でもこの出血がとまっていない人が多いです。本当は1カ月でとまるのですけれども、まだまだ出血している人が多いということは体が戻り切っていないということです。21日は養生といって、自宅でなるべく家事はしないこと、とにかく水をさわらなくてもいいような生活をするということです。

でも、昔ながらの養生と変わったことというのは、清潔にはしてほしいということです。昔の人は頭を洗ってはだめと言われて、お風呂も入ってはだめでした。なぜかという、昔のお風呂は外にあって、薪でたいています。薪でたいたお風呂を何日間か使用すると、お湯が汚れます。分娩後は出血していますので、その汚いお湯をかけると、産褥熱という感染を子宮内に起こしてしまい、一番致死率が高かったのです。今の時代はシャワーからきれいなお湯が出てきます。出血は悪露といって、子宮の栄養をたっぷり含んだ出血です。母乳も栄養たっぷりです。べたべたですので、シャワーのきれいなお湯で流してもいいです。ただ、膣内、子宮内に入らないように、1カ月は湯船につからないでください。シャワーは浴びてもいいですし、頭も洗っていいです。昔に比べたら、自宅も機密性が高くなってきて、すき間風も入りません。ドライヤーもあり、自宅も暖かいということで、頭も洗って乾かしていいです。昔からの言い伝えから、今の住宅状況にあって変わってきたこと、養生は大事で、冷やさないことが大事というような、大事にしなければならないこと、でもシャワーは浴びていいなどがあります。ただ、水にさわるなどいっても、顔を洗ったり、赤ちゃんをお風呂に入れたりということはしてもいいというのはつながっているのだから、医療者に聞いていただければ大丈夫です。どんどん歩きなさいというわけではなくて、帝王切開後は血栓症、飛行機に乗ったりするとなるエコノミー症候群が手術後は起きるので、帝王切開の後は歩きなさいといいますが、どんどん動けというわけではなくて、その血栓

症の予防だけですので、産後は自宅に帰ったら安静にするというのが正しいです。

2点目の健診の仕方ですが、公費で今まで負担されていたのが、お母さんは1カ月健診まで、あとはもう赤ちゃんのための健診だったので、赤ちゃんのためのお金はあるけれども、お母さんたちのためには何もありませんでした。ことし、去年ぐらいから産後健診とって、市町村によっては2回補助が出まして、2週間健診や1カ月健診などで早目にお母さんのケアを受けられます。あと1カ月健診、3、4カ月健診、6、7カ月健診ということで市町村によって違って、毎回集団で保健センターに来ていただくところと、大きい市町村だと毎回病院に行きなさいというところがあります。

3点目の訪問にかぶってくるのですが、市町村で違いまして、軽米町は生まれて1カ月以内に必ず保健師が新生児訪問に行っています。あとは、赤ちゃん訪問と呼ばれる訪問も必ず行きますので、必ず2回はお邪魔しているというやり方でした。あと、遠野市もこの産後ケアの予算がついて、その予算を使って妊婦訪問、新生児訪問、赤ちゃん訪問を専門職が行っているはずですが、問題は、保健師の働き方だと思います。花巻市はよく知っているのですが、平成の大合併で合併しまして、保健師の業務量が非常に多いです。見ていると、事務の方でもできる仕事をずっと保健師がパソコンをにらんで入力作業をやっています。そういう作業がふえればふえるほど保健師の外への訪問活動に行く時間がなくなります。あとは予算です。そこの訪問に行ける保健師、助産師、看護師を雇う予算が削られています。こんにちは赤ちゃん事業はとにかく4カ月以内に1回、誰かが行けばいいという市町村と、そこにしっかり予算をつけている遠野市のように、何回も同じ人が行くことでその人のことがよくわかり、家庭に入るとよくわかるから指導もできます。今のお母さんたち自身が家に来てもらうのが嫌いという人も多いので、来ても絶対に上げてくれない人、玄関先で終わる人もいるので、昔みたいに御近所とつき合ってきた世代ではないので、自宅に来られるのが嫌だという人がいるという社会状況もあると思いますが、本来はこちらも大事にしていくのが政策なのではないかと思っております。

○千葉絢子委員 私は、一番上の子と3番目を産むまでに7年間のギャップがあって、その7年の間に県内の出産できる施設が20ぐらい減ってしまっていました。上の子を産んだときには、53カ所ぐらいあったのが、一番下の子のときは30数カ所になっていて、私の地元でも里帰りすらできなくなってしまったという人たちもいました。

第一子を産んで里帰りせずに同居していると、余計に休みにくいと言うことができず、家族から批判されてしまう。そういうお母さんたちが、上の子はどうする、家の家事はどうするといった、そういう意識改革が産後ケアに向かうお母さんたちの自責の念を駆り立ててしまうというのがあると思います。

うちは上の子を産んだときに、大正生まれのひいおばあちゃんがいて、寝かしつけて一緒に寝てしまうと、俺たちがお母さんになったころは、子供と一緒に寝るなんていうことは絶対に許されなかったみたいなことを言われて、日中フルタイムで仕事して、帰ってきて、子供のお世話をして、寝かしつけて、そのまま倒れてしまう、それすらも許してもら

えないような状況でした。私は、産前産後ケアというのは、本当に余裕のある方しか受けられない、核家族だったら御主人も包容力もあって、行ってきていいという恵まれた方しか受けられないという誤解をしておりました。

そういうグリーゾーンにいて、産後クライシスとか、あとは鬱とかにならないために、お母さんに来てもいいということと一緒に、家族の意識改革がすごく必要だと思いますけれども、そのための方法はどんなことができるのでしょうか。

○佐藤美代子講師 本当に大変な産後を過ごされたのだと思って、おっしゃるとおりだと思います。この前NHKで、産後ケアの話を取り上げたいと言われたときに、産後鬱を救えというタイトルもありました。産後鬱を救えだと、産後鬱の人が行く場所にしか見えなと言ったのですが、マスコミは産後鬱の人や、恵まれたお金持ち、夫の理解がある人などが行く場所ととりたいたいわけです。でも、実際の今のシステムだと、本当にそうなのです。お昼も食べて寝られて1日3,000円というのは安いと言われるのですが、3,000円を安いと言える人しか来られないのです。統計は出していないですが、今来ている利用者は、公務員の妻とか自分も公務員、教職、看護師、保育士が多いです。でも、私たちが目指すところは、さっき申し上げたように、そうではない人たちも来ないといけない。特に岩手県はお母さんたちだけではなく、産まれたらあそこへ行くみたいに社会を啓蒙して、恵まれた人が行くのではなくて、子供が産まれたならばみんな1回は利用しよう、1回は無料で行って、初めてそういうものだという家族への世間に対する産後ケアの浸透をしていかなければならないと思っていて、そのために必要なのが議員の力だと思います。

今御家族に難色を示されているお母さんたち、この人もうだめだ、多分ここにずっといると、もうしんどくなるという人たちに言うのは、おっばいが大変だから助産婦さんに見てもらわなければならないから行きますと言ってと話しています。おじいちゃん、おばあちゃん世代、お母さん世代は、病院で行けと言われたというと、意外と素直に、それこそ健診が変わっていったように、今どきはそういうものかと言って、助産婦が来いと言ったらしようがないということで、医者や保健師、助産師が言ったという言葉に弱いです。

沿岸部ですずっとやっていたサロンも、そのために必ず専門職を配置しました。子育てサークル、ママサークルはお父さんが働いている間に遊びに行くのかと言われた人が、何とか君の体重をはかりに行ってきますと言うと、おばあちゃんからよし行けと許可をもらえたという話を聞きました。

産後は今の世の中、ちょっと転ぶとグレーではなくてブラックに行ってしまう人が多いです。北上市で事件が起きましたが、1件起きたら大騒ぎします。でもセーフティネットの下に本当に危ない人がぼろぼろいるわけです。どうやってセーフティネットの上にあがっていくのかというと、それは保育園かもしれない、近所のおばちゃんかもしれない、産後ケアかもしれないということで、セーフティネットを少しずつふやしていかなければだめではないかということで、啓蒙活動を行っています。県として、岩手県は病院も少なく、行けないのだから、せめて産前産後だけはしっかりと守りましょう、分娩は病院にし

っかり行って、そこで守っていただいて、お産をして、その後はちゃんと市町村で確保しましょうなど、そこから広げていくのが議員であると思います。あとは行政で虐待があったら通報のように、産後ケアが安心な場所ということを皆さんに浸透するように御協力いただきたいと思います。

○高田一郎委員 産前産後のケアといいますか、地域包括支援が本来どうあるべきかということについていろいろと勉強になったお話だったと思います。

それで、今の質問にもかかわることですが、全てのお母さんたちが気軽に利用できる環境をどうつくっていくかということだと思うのですが、先ほどお話のあったグレーの方々が、支援によっては低リスクになったり、あるいはハイリスクになったりするということだと思います。具体的なイメージとして、そういったグレーの人たちに具体的な支援を差し伸べる、具体的にまんまるママいわてを利用できる人はいいのですけれども、そうでない人に対する支援については、先ほど市町村によって違うという話がありました。お母さんとか子供が定期的に健診をやっている自治体とそうでない自治体もあって、そういうものをふやして行って、悩んでいる方々に手を差し伸べて、さまざまところに連携していくということが大事かと思います。具体的にグレーの方々に対する支援というか、待っていてもなかなか来ないと思うので、その辺はどのようなイメージとして今後取り組んでいかなければならないのか伺います。

もう一つは、お泊まりの話も出ましたけれども、経営面での行政の支援というのが非常に大事になってくると思うのですが、行政が具体的にどんな支援をすれば、そういった取り組みも具体的にできるのか、市や県の支援はどうあるべきかについてもお聞きしたいと思います。

○佐藤美代子講師 具体的な支援をグレーの方々に対してどうしていくかというのは、市町村独自にはなるのですが、本来は自分が行ける場所にこういう産後ケア施設があるべきだと思っています。多分どこの市町村にも保育園がないとか、学童保育の施設が一個もないというところはありません。でも、多分40年とか50年前のお母さんは、3歳まで働くなってもってのほかみたいな時代があったと思います。私は医療職なので、岩手県医療局労働組合などの女性の多い職場は組合とかが病院独自の保育園をつくって、働くお母さんを確保するために子供たちの預け先ということで、保育園の支援がスタートしていましたが今は当たり前にあります。なので、まんまるママいわては今花巻市にしかないですが、似たような産後ケア施設が本来は近くにあるべきだと思います。多分今すぐは難しいので、その市町村独自のファミリーサポートセンターや、一時保育はあるのですが、利用されていない健診のシステムについて、盛岡市だと民間の家事サポートの会社もたくさんあり、花巻市にはなく、北上市にはあるといったように市町村によって状況が全然違うので、まず市町村で何に取り組んでいて、自分の市にはどんな支援があって、それが機能しているのか確認が必要です。機能していないのであれば、何でお母さんたちは、使わないのかをもう一回洗い出して、お母さんたちが何を求めているのかというニーズが合っていないか

ら利用率が上がリません。保育園も足りていて、充足率 100%ですというけれども、電話かけたけれど無理と言われたから幼稚園に入れましたという、準待機児童は数に数えられていないなどという人の声は入っていません。非常に失礼な言い方をすると、議員はそういう数字の読み取りをちゃんとしなければならぬと思います。市や県から挙げられた数字を見るだけではなくて、本当にこの数字が正しいのか、その裏にどんなことが隠れているのか、お母さんたちが困っていないのかということ声を上げていくということが必要だと思ひます。

大体にしてお母さんだけが困っているという状況がおかしいです。働き方改革と言われてはいますが、お母さんが大変なのはお父さんが帰ってこないからです。私もけさ夫婦げんかして、ママはちょっと外食が多過ぎる。外食が多いから、外食費を減らすためにうちの小学5年生の息子に、これからママと外食したらその費用を書けと、そうしたらそれがためられる分ではないかと言うのですが、おかしいです。外食しないと暮らしていけない。洗濯はしなければならず、掃除はしなければならぬ、じゃあ習い事の日ぐらひは外で御飯を食べていこうとしない私は生きていけません。夫が早く帰ってきたら、夫に子供をお風呂に入れてもらっている間に御飯をつくれるけれども、そうではなく、お風呂も入れて、宿題も見て、何だか全部1人でやっているから大変です。でも、そこにお父さんの家事サポートが入り、6時に帰ってきたら、私はきょうお迎えに行かないでそのままスーパーに寄っていくから、あなたがお迎えに行くと云ったらできるかもしれないので、こういった働き方改革も大事なのかと思ひます。

具体的にですが、若者の世代が何を考へているのか、20代から30代が何を考へているのか、どんなことに困っているかについては、市町村のアンケートのとり方だけでは出てこないと思ひるので、それはぜひ聞いていってほしいと思ひます。

二つ目は、経営面で、県、市町村が何をすべきかでした。実はこの産後ケア事業に関しては、国と市町村事業なので、2分の1ずつの予算です。私どものような弱小の団体には、国の予算が幾らついてはいますみたいな要綱はおりてきません。その要綱をまず知らないのて、いろいろつてを探して、これぐらひ補助金がつくらしいと云ってやっています。でも、今やっけてわかるのですが、花巻市だけではなく、ほかの市町村から里帰りとか隣の人もあるわけです。本当は県でこのシステムを使ってくれれば一番いいのですが、厚生労働省のやり方だと県には予算がつきません。国と市町村が手を挙げないと2分の1ずつではないから、県がもしやっけてしまうと、県の予算を丸々使わなければならぬので、私も何回か県に行ったのですが、まず市町村にやっけてもらうように頑張っけて声をかけますという対応でした。でも、県で少子化対策というのであれば、例えば使いたい人が使えるようなところは予算を通してもいいのではないかと思ひます。あとは逆に私のように経営のことを知らなくても、若気の至りの世代なのでやりたくて無我夢中でやっけてしまったのですが、まだ、50代、60代の助産師さんたちに自分の市にも必要ということをやりたい人がいます。だけれども、私のように団体を立ち上げたり、行政と交渉してと

いうのは私には無理だからやめると言います。すごくもったいないと思うので、本当にそういう人たちがいるのか、では何があったらその人たちはこういう活動ができるのか。助産師に経営から何から任せるのは変な話だと思うので、それは行政で事業や予算を組み立てるノウハウを持っています。そういうところをしっかりと行政が枠組みを立てて、中のケアするところで募集して、そこにちゃんと予算がつけば、でき上がる市町村は何個かあるのではないかと思います。それを見ると、またほかの市町村でも、あの規模でよければうちでも宿泊しなくてもこれぐらいだったらできるみたいなのはできてくると思うので、ぜひその予算立てのとり方から、そういうやりたい人たちに教えて、やりたいという気持ちが潰れないうちに声をかけていただきたいと思います。

○佐々木努委員長 ほかにありませんか。花巻選挙区の議員の方々、何かないでしょうか。よろしいですか。

〔「なし」と呼ぶ者あり〕

○佐々木努委員長 それでは、ほかにないようですので、本日の調査はこれをもって終了いたします。

佐藤様におかれましては、お忙しいところ、出産前後の女性を心身両面でサポートする産前産後ケアハウスまんまるぼっとの取り組み等についてわかりやすく丁寧にお話をいただき、まことにありがとうございました。

私ごとではありますけれども、私も3人の子供、そして今2人の孫がいるわけなのですが、娘もちょっと産後鬱っぽいところがありまして、本当に子供を産んで育てるというのは大変だということを今深く認識し、反省をしているところであります。きょうのお話も含めて出産環境、そして産後ケアの環境をもっともっとよくしていかなければならないなと感じています。きょう出席の委員も、皆そのような思いでこれから取り組んでいただけるものと思いますので、どうぞ佐藤様におかれましては、これからも岩手における産前産後ケア体制のさらなる構築に向けて御支援をいただければと思いますので、よろしくお願いいたします。本日は大変ありがとうございました。

○佐々木努委員長 委員の皆様には、次回の委員会運営等について御相談がありますので、しばしお残り願います。

次に、9月に予定されております当委員会の調査事項についてであります。御意見等はありませんか。

〔「なし」と呼ぶ者あり〕

○佐々木努委員長 特に御意見等がなければ当職に御一任願いたいと思いますが、これに御異議ありませんか。

〔「異議なし」と呼ぶ者あり〕

○佐々木努委員長 御異議なしと認め、さよう決定いたしました。

以上をもって本日の日程は全部終了いたしました。本日はこれをもって散会いたします。